

# 30Q-pm28

名古屋市立大学薬学部の製剤学実習における味覚センサー導入の試み～第2報～  
田上 辰秋<sup>1</sup>, 福重 香<sup>1</sup>, 竹内 堂朗<sup>1</sup>, 東久保 宏一<sup>2</sup>, 池崎 秀和<sup>2</sup>, ○尾関 哲也<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>名市大院薬, <sup>2</sup>Insert)

【目的】名古屋市立大学薬学部は、昨年度の製剤学実習項目に「味覚センサーによる味覚の評価法」を全国で初めて導入した。味覚センサーは、薬物の苦味および苦味マスキング技術の定量的評価法として製薬企業にすでに導入されており、薬学部の学生が味覚とその評価法について学習することは大きな意義がある。今年度はさらに、苦味マスキング技術の開発が重要である口腔内崩壊錠 (OD 錠) の製造を実習内容に加え、本実習項目の充実をはかった。本発表では今年度の実習内容の報告と実習終了後に行ったアンケート調査の回答結果の報告を行う。

【方法】実習内容は、学部3年生を対象に①OD錠の製造と②味覚センサーによる味覚の評価法の項目を実施した。項目①に関しては、インストラクター指導のもと、学生が実際にOD錠を打錠した。専用の油圧プレス・杵・臼を用いて、異なるプレス圧、もしくは異なる処方により打錠した。錠剤はそれぞれOD錠専用の崩壊試験装置 (トリコープテスト)、錠剤硬度計により評価した。項目②に関しても、学生自身の舌による官能試験と同時に、味覚センサーによる味の測定を行い、それぞれの長所と短所について学習を行った。実習後にアンケート調査を行い、味覚センサーと官能試験に対する興味・理解について学生が回答した。

【結果・考察】実習に参加した学生 (約 100 名) の大多数が本実習に興味を持っている (98.9%)、よく/なんとか理解できた (100%) と回答した。官能試験は学生にとって初めての機会であり、主観的な評価になるため特に難しいと感じる学生がいた。一方で、客観的な数値評価が可能な味覚センサーの有用性についてよく理解することができたと考えられる。OD錠製造の導入により実習内容を充実させることができた。今後も学生が主体的に取り組める実習を行っていく予定である。